

本書発刊にあたって

家の近くの海辺や森の奥深くに分け入っては、さまざまな貝殻を拾い集めていた。持ち帰っては並べ、それを見入ることに至福のときを過ごしていた。教室から抜け出しては野山をめぐってばかりいた。エドワード・シルベスター・モースの少年時代の日々の光景である。

1838年、モースはアメリカ東海岸のメイン州ポートランドの地で、父ジョナサン・モース、母ジェーンがもうけた7人兄弟の3番目として生まれた。学校にはなじめず、自然のなかで生き物を観察していることのほうを何にもまして好み、この「自然児」に対し両親や教師たちはモースのふるまいに悲嘆にくれていた。

「モースはどの学校からも放校処分になった。ポートランドの村の小学校はもとより、1851年にはコンウェイ学園から、続いて54年にはブリジットン・アカデミーから退学処分を受けている。先生たちはモースの荒々しい気性、権威に対する反抗心、そして森の中や海辺をさまよって授業を無視することを嘆いた」¹。このようにモースは周囲から、いわゆる「問題を起こす子」というレッテルを張られた。

その後、ポートランド社に製図工として入社する。1856年には公立ベセル高校に入学したが、同年に退学。再びポートランド社に復職した。上司と折り合いが悪く、衝突が絶えなかったモースだが、仕事の合間を見ては、相変わらず貝殻を集めることに熱中していた。それが高じて、貝のコレクションでは地元で名を知られる存在となった。やがて学者たちにも一目おかれるようになる。ポートランドやボストンの博物学会などで意欲的に活動し、その舞台を広げていった。

この少年が長じて高名な博物学者としてアメリカの学会で名を馳せるなどと、そのとき誰が想像したであろうか。モースは1877年（明治10）から3度にわたり開国後まもない日本に滞在した。39歳のときである。来日すると、たちまち当時の日本人の暮らしぶりに深く魅せられ、親愛の情を抱くようになった。そして、日本と日本人を知り尽くしたいという抑えがたい欲求のもと、さまざまな活動を繰り広げるとともに、とくに明治初期の庶民の暮らしの諸相を示す、ありとあらゆるものを収集した。美術品にはあまり関心がなかったとみえ、集めたものはもっぱら何の変哲もない身の回りの品々が中心であった。

なかには現代の日本ではすでに湮滅^{いんめつ}してしまったものが多々ふくまれる。彼が形成した日本コレクションとは、当時の日本人たちからすれば、あまりにもありきたりなものであった。しかし、これらの膨大な資料群は、こんにち「モースコレクション」と称され、全米最古といわれるピーボディ・エセックス博物館が誇る日本コレクションの中核をなしている。

¹ ドロシー・ウェイマン『エドワード・シルベスター・モース』蜷川親正訳、中央公論美術出版、昭和51年

さて、ピーボディ・エセックス博物館と江戸東京博物館とは、長きにわたり親密な交流を続けてきている。モースコレクションを借用のうえ、1993年（平成5）年の開設時の江戸東京博物館常設展で「モースのみた東京」というコーナーを新設して展示をしたり、あるいは大がかりな特別展を2度ほど開催したり、わが国ではあまり知られていなかったモースとモースコレクションについて、都民をはじめ現代の日本の人びとに紹介する機会を可能な限りもうけてきた経緯がある。

両館の交流がこのほど30周年を迎えることから、この際、これまでに得られた展覧会や同コレクションの成果をここで調査報告書にまとめ、とりいそぎ中間報告として刊行する企画がもちあがった。展示ではモースコレクションのうちの数百点を実際にお披露目できたものの、展覧会や図録では表すことができなかつたこと、さらにその後に進んだ研究の成果などをあらためて紹介する契機としたい。とりわけ次代を担う若い方々に、この稀有でユニークなモースコレクションが、140年前の私たちの祖先の暮らしぶりを知る手がかりとなればこの上ない喜びとするものである。

江戸東京博物館 副館長

小林 淳 一